

小学生の「担任教師に対する信頼感」尺度の作成

筑波大学大学院人間総合科学研究科 村上 達也

東京都福祉保健局 坂口 奈央

筑波大学人間系 櫻井 茂男

Development of a scale of trust of homeroom teacher in elementary-school children

Tatsuya Murakami (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Nao Sakaguchi (*Bureau of school welfare and public health, Tokyo Metropolitan Government, Tokyo, 163-8001, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study has two purposes. The first is to develop a scale of trust of homeroom teacher in elementary-school children. The second is to examine developmental changes in trust of homeroom teacher in elementary-school children. The participants were 347 fourth to sixth grade elementary-school children (161 boys, 181 girls, and 5 unknown). The results of a principal component analysis revealed that the scale of trust of homeroom teacher in elementary-school children is constructed from one component. The scale has high reliability and validity. Moreover, ANOVA results revealed that fourth-grade pupils have high levels of trust of homeroom teacher than fifth- and sixth-grade pupils.

Key words: trust, trust of homeroom teacher, elementary school children

問題と目的

児童のいじめ・不登校といった学校不適応が社会問題として取り上げられるようになって久しい。例えば、小・中学生を対象とした文部科学省（2011）の統計では、平成22年度のいじめの認知（発生）件数は、小学校では35,988件、中学校では32,348件であり、依然として高い値であり続けていることが示された。また、不登校児童は21,675人（308人に1人）、不登校生徒は93,296人（37人に1人）という高い値であることも示された。

こういった児童・生徒の学校不適応への対処の一つとして、授業など日常生活の中で彼らと直接関わる教師の役割が見直され（五十嵐，2009；石隈，1999；大野，1997など）、教師－児童・生徒関係の研究が行われている（例えば、飯田，2002；小

林・仲田，1997）。特に近年は、児童・生徒が教師を信頼すること、すなわち「教師に対する信頼感」に焦点を当てた研究が行われている（中井・庄司，2006，2008；坂本・内藤，2001；佐竹，2003）。また、学校教育現場においても児童・生徒や保護者から「信頼される」教師が求められており、多くの学校が学校目標の一つに、児童・生徒にとって「信頼される」教師であることを掲げている。しかし「児童・生徒が教師を信頼する」ということは具体的にどうということなのであろうか。それを明らかにするために、まず心理学における信頼感の研究を概観する。

信頼感に関する先行研究

さて、信頼感に関する研究は、大きく分けて、以下の三つの理論を中心に展開されている。第一は、Erikson（1959）を中心とする精神分析理論による

基本的信頼感、第二は Rotter (1980) を中心とする社会的学習理論による対人的信頼感、そして第三に、実験社会心理学のゲーム理論における信頼感である。本研究で扱う小学生の担任教師に対する信頼感、二つ目の対人的信頼感に含まれる。

人間一般に対する信頼感 対人的信頼感研究において、まず注目されたのが人間一般に対する信頼感であった。Rotter (1967) は、この人間一般に対する信頼感を「対人間の信頼 (interpersonal trust)」として、「他の人や集団の言葉、約束、口頭や文書による陳述をあてにできるという般化された信念」と定義した。そして、この成人の対人信頼感を測定する尺度を作成し、信頼感に関する実証的研究 (Rotter, 1967, 1980) を推進した。この人間一般に対する信頼感の研究は、我が国においても行われており、例えば山岸 (1988) は、アメリカと日本の成人の人間一般に対する信頼感を国際比較し、アメリカの学生の方が際立って信頼感が高いことを明らかにしている。また、天貝 (1995) は、人間一般に対する信頼感 (他人への信頼感) と自分に対する信頼感 (自己信頼感) の両側面を含んだ信頼感尺度を作成し、高校生の自我同一性の獲得に他人への信頼感と自己信頼感のどちらもが重要であることを指摘している。こうした人間一般に対する信頼感に関する多くの実証的研究が行われる中で、続いて関心がもたれるようになってきたのが特定の他者に対する信頼感である。

特定の他者に対する信頼感 特定の他者に対する信頼感として、まず焦点を当てられたのが青年期を対象とした恋人や配偶者といった親密なパートナーへの信頼であった。Larzelere & Huston (1980) は、パートナー間の信頼を「自分に向けられた、重要な他者からの善意や正直さに裏打ちされた相手を信じる程度」と定義し、尺度を作成している。また、同じく大学生を対象としたパートナーに対する信頼感について検討した Rempel, Holmes & Zanna (1985) は、信頼感を「相手からの暖かい反応や相手を信用し、安心であるという感覚。また、相手が自分に対して公正で、誠実で、好意的な感情をもって対応してくれるという信念」と定義し、Larzelere & Huston (1980) とは異なる要素から構成される信頼感尺度を作成している。我が国においては、山岸 (1998) のいう人間関係の信頼がこれに相当すると考えられる。人間関係の信頼とは「相手が自分に対してもっている態度や感情についての判断に基づくものであり、相手が他の人間に対してはともかく、自分に対しては信頼に値する行動をとる傾向を持つ人間であるという期待」と定義される。以上のよう

に、特定の他者に対する信頼感に成人を対象として検討が行われてきた。

これに対して、酒井 (2005) は、特定の他者に対する信頼感に関する研究が青年期以降を対象としたものが多く、児童期から青年期にかけての研究が少ないことを指摘した。そして、この時期の児童の発達に周囲の人間が与える影響が大きいことから、児童期の特定の他者に対する信頼感の検討の重要性を述べ、研究を行っている。この研究において、児童にとっての特定の他者は、親などの養育者や友だちであるとし、青年期の特定の他者に対する信頼感とは定義も大きく異なると考えた。そして「相手の自分に対する態度や感情などの情報から得られる、相手に自分を裏切る意図がなく、自分を幸福にしようとしているであろうという期待が持てる感覚」と定義し、小学生を対象に親や友だちに対する信頼感尺度を作成した。そして、この時期の重要な他者に対する信頼感に「相手を信頼している感」の一方向的なものであることを明らかにした。また、海外においては、Rotenberg (2001) が同様に児童期の重要な他者に対する信頼感について検討を行っており、この時期の児童にとって母親、父親、友だちに対する信頼感が非常に高く、また各対象によって信頼感の構造が異なることを指摘している。このように児童期においても特定の他者に対する信頼感が少しずつ検討される中で、近年では児童期から青年期の子どもにとって親や友だち以外に重要な特定他者として教師が取り上げられ、教師に対する信頼感について研究が行われるようになってきた。

教師に対する信頼感 教師に対する信頼感を取り上げた研究として、中井・庄司 (2006) の研究がある。彼らは、中学生を対象に教師に対する信頼感尺度を作成しており、信頼感に、教師がいることによる「安心感」、教師に対する「不信」、生徒が教職という職業についている教師に対して期待しているという「正当性」の三つから構成されるとした。また、佐竹 (2003) は、高校生の教師に対する信頼感を生起させるような教師行動について検討し、信頼感生起には、教師が生徒に対して「安心感」、「被受容感」、「好感」、「被尊重感」を抱かせることが必要であることを明らかにした。これについては、教師態度についても検討されており (植草・松元, 1995)、「人間としての姿勢に関わる態度」、「支持・理解・受容態度」、「暖かい、親しみやすい態度」が重要であるとしている。また、坂本・内藤 (2001) は、小学生を対象として研究を行い、教師の児童への自己開示や、PM 指導行動のうち M 指導行動 (集団維持機能) を取ることで、児童の信頼感に正の影響を与えるこ

とを明らかにしている。このように、近年、教師に対する信頼感研究は精力的に行われているが、こうした研究には以下のような問題が存在する。

先行研究の問題点

第一に、先行研究で使用されている教師への信頼感を測定する尺度が研究者によって様々であり、一定していないことである。これは、酒井（2005）が指摘しているように研究者間で信頼感の捉え方、つまり信頼感の定義が異なることに起因する問題であると推測される。このため、研究によって信頼感の構成要因とされるものが、別の研究では信頼感の関連要因あるいは影響要因になるというような結果が生じている。例えば、上記で取り上げた中井・庄司（2006）の教師に対する信頼感尺度では、教師に対する「安心感」は、信頼感を構成するものとして含まれているが、佐竹（2003）の研究によると、「安心感」とは信頼感を生起させるために必要な生徒側の感情、つまり信頼感の関連要因として扱われている。このように研究者がそれぞれ独自の信頼感尺度を作成しそれをを用いて研究を行っているため、「児童が教師を信頼するということはどういうことなのか」に関する一貫した見解を得ることは困難であるといえる。したがって、先行研究における教師に対する信頼感の定義を整理し、再定義を行う必要がある。

第二に、小学生の教師に対する信頼感研究が、中学生や高校生の教師に対する信頼感研究に比べるとほとんど行われていないことである。天貝（2001）は、信頼感は発達に伴い変化するものであると指摘し、思春期はちょうど信頼感の再獲得の時期にあたるとしている。そして、この時期に関わる教師は、中・高生にとって信頼感の望ましい発達を促すための発達援助者であることも示している。こうした知見を基に、先行研究では中・高生を対象とする教師信頼感の研究が行われてきた。しかしFurman & Buhrmester（1985）は、11歳から13歳の時期は、教師を自分にとって有益な援助者と見るようになり、教師に対する信頼感も母親、父親、友だちに対する信頼感と同様に変化することを指摘した。この11歳から13歳までの時期は、小学校高学年の時期に相当する。また、岸田（1983）は、小学校中学年から高学年にかけて、教師に対する信頼的、肯定的、親和的態度が一部批判的な態度に変化する時期であることを明らかにしている。さらに、佐藤・服部（1993）によると、学級担任制をとる小学校と教科担任制をとる中学校とでは、教師の児童への影響力は小学校の方が大きいとし、小学生にとっての教

師の役割の重要性を示唆している。これらの指摘を踏まえると、教師に対する信頼感は、小学生にとっても重要であるといえる。また、特に中学年から高学年の小学生を対象に検討することは、中学生以降の教師に対する信頼感への移行期を扱うことを意味し、信頼感の発達という観点からも意義深いであろう。

以上を踏まえ、本研究では、第一の問題点より①従来の研究における教師に対する信頼感の定義を概観した上で、それらを統合した再定義を行い、それを基に小学生の教師に対する信頼感を測定する尺度を作成する。そして、二つ目の問題点から、②小学4年生から6年生を対象とした教師に対する信頼感について検討を行う。

本研究における教師に対する信頼感の定義

上述したように、先行研究における教師に対する信頼感の定義は、研究者によって様々である。例えば、佐竹（2003）や中本・森・屋良（2007）は、「教師を信じ頼ること」として、人間一般に対する信頼感の定義の対象を教師に置き換えて定義を行っている。一方、酒井（2005）は、信頼の対象が人間一般なのか自分にとって重要な他者なのかによって、信頼の定義は大きく異なると指摘しており、またRotenberg（2001）も、信頼の構造は信頼する対象によって変わるものであることを明らかにしている。したがって、教師に対する信頼感は人間一般に対する対人的信頼感とは異なった定義をする必要があると推測される。

また、中井・庄司（2008）は、中学生における担任教師に対する信頼感尺度の構成要素に基づき、「教師を信じ頼ること。教師の行動の予測可能性。教師との関係に対する自信と安心感。教師としての資質や能力に対する役割期待を含む」と定義を行っている。これは、教師という特定の他者に対する定義であり、酒井（2005）の対人的信頼感や山岸（1998）の人間関係的信頼感に相当するものであるといえよう。しかし、酒井（2005）は特定の他者に対する信頼感の発達の検討を行った結果、児童の重要他者に対する信頼感は一次元構造であることを明らかにしている。従って、本研究で扱う小学生の担任教師に対する信頼感も中井・庄司（2008）が示すような複数の要素から構成されるのではなく、「担任教師を信頼している感」の一次元構造であると考えられる。

以上のことから、本研究では酒井（2005）と山岸（1998）の定義を参考に、担任教師に対する信頼感を「小学生が担任教師に対して一方向的に感じている、信じ頼ることができるという主観的判断とそれ

に基づく担任教師が自分を幸福にするような行動をしてくれるであろうという期待」と定義する。

本研究の目的

本研究では、上記の定義に従い、小学生用の担任教師に対する信頼感を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを第一の目的とする。尺度の信頼性に関しては内的整合性を検討する。尺度の妥当性に関しては構成概念妥当性の検討として、教師に対する自己開示尺度（佐藤・阿部, 1997）との関連で検討する。すなわち、担任教師に対して高い信頼感を抱いている児童ほど、担任教師に自分の内面的なことや表面的なことについて話すことは多くなるであろうと考えられ、作成した尺度との間には正の相関が予測される。次に、作成された尺度を用いて、信頼感の発達の変化を明らかにすることを第二の目的とする。

方 法

調査協力者

茨城県内の公立小学校1校の4～6年生347名を対象に調査を行った。内訳は4年生4クラス130名（男子56名、女子74名）、5年生4クラス120名（男子54名、女子61名、不明5名）、6年生3クラス97名（男子51名、女子46名）であった。

調査時期

調査は2009年の7月中旬に実施された。

調査内容

基本属性として、学年、性別を尋ねた。続いて、下記の尺度を実施した。

(1) **担任教師に対する信頼感尺度原案** 担任教師に対する信頼感尺度について、原案5項目を作成した。この5項目は、大学教員1名、心理学を専攻する大学院生3名、小学校教諭1名によって内容的妥当性、表現の適切さについて確認された。教示として「担任の先生に対して、あなたは、ふだん、下に書かれていることをどのくらい感じているでしょうか」と尋ねた。回答方法は、「よくあてはまる(4点)」、「少しあてはまる(3点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「ぜんぜんあてはまらない(1点)」の4件法であった。

(2) **教師に対する自己開示尺度** 児童が担任教師に対し、どのくらい自分のことを話すのかを測定するために、佐藤・阿部(1997)の児童用自己開示尺度を使用した。この尺度は、「表面的自己開示(例:自分の趣味・特技、あるいは最近興味を持っていることについて話しますか)」に関する3項目、「内面的自己開示(例:友だちとのもめごとやけんかをしたことを話しますか)」に関する2項目の合計5項目から構成された。「あなたは、ふだん、担任の先生にここに書かれていることをどのくらい話しますか」と教示し、回答を求めた。回答方法は、「よく話す(4点)」、「少し話す(3点)」、「あまり話さない(2点)」、「まったく話さない(1点)」の4件法であった。

的

調査手続きおよび倫理的配慮

調査は各学級担任に依頼し、授業時間およびホームルームの時間を使用し、担任教師によって実施された。実施の際には、調査への参加および中断は自由であること、学業成績とは無関係であり、回答によって不利益をこうむることがないこと、がわかりやすく説明された。また、担任教師に見られたくない内容であることを考慮し、質問紙の配布時には封筒に入れて配布し、回収時にはその封筒に入れて提出するように求めた。実施時間は約20分であった。

結果と考察

担任教師に対する信頼感尺度の主成分分析

担任教師に対する信頼感尺度5項目について、主成分分析を行なった(Table1)。固有値が3.55, 0.51, 0.40…と減少推移したことから、固有値1以上を基準に1主成分分解を採用した。第1主成分の負荷量は5項目とも.79以上となり、累積寄与率は71.06%であった。このことから、本研究で作成した信頼感尺度は、一次元構造であることが確認された。この結果は、酒井(2005)における、児童期は認知発達未熟なため、重要な他者に対する信頼感「相手を信頼している感」の一次元構造が確認されるとした知見と一致する。

担任教師に対する信頼感尺度の記述統計

上記の結果に基づき、5項目の加算平均を算出し小学生の「担任教師に対する信頼感尺度得点」として以後の分析に用いた。担任教師に対する信頼感尺度得点が高いほど、担任教師に対する信頼感の程度が高いことを意味する。担任教師に対する信頼感尺度について α 係数を算出したところ.90という値が得られた。これにより、十分な内的整合性が確認された。担任教師に対する信頼感尺度の平均得点は3.04、標準偏差は0.81であった。理論的中間値である2.50よりも大きな値であったことから、調査協力者であった小学生は担任教師に対して比較的高い信頼感を抱いていることが明らかになった。この結果は、中学生以降の生徒と比べると小学生は教師に

対して安定した態度、絶対視を示すという三隅・矢守（1989）の知見と対応する結果であると考えられる。

担任教師に対する信頼感の性差・学年差

担任教師に対する信頼感の性差および学年差を検討するために、性別（2水準）と学年（3水準）による2要因分散分析を行った（Table2）。その結果、学年の主効果が有意（ $F = (2, 312) = 6.73, p < .01$ ）であった。一方、性別の主効果と学年と性別の交互作用は有意とならなかった。学年の効果に関する多重比較の結果、4年生が5、6年生よりも担任教師に対して有意に高く信頼感を抱いていることが明らかとなった（4年生： $M = 3.24, SD = 0.71$ 。5年生： $M = 2.93, SD = 0.77$ 。6年生： $M = 2.93, SD = 0.77$ ）。これは、坂本・内藤（2001）の、小学校高学年になると担任教師への態度が一部批判的態度に変化し、担任教師を見る目も厳しくなっていくという発達の知見に対応した結果であると解釈できる。

担任教師に対する信頼感と自己開示との相関

まず、担任教師に対する自己開示尺度の記述統計の算出および内的整合性の検討を行った。担任教師に対する自己開示の平均得点は2.43、標準偏差は0.85であった。また、 α 係数を算出したところ.83という値が得られ、内的整合性が確認された。

次に、作成した尺度の構成概念妥当性を検討するために、担任教師に対する信頼感尺度と児童用自己開示尺度との相関係数を算出した結果、有意な正の相関係数（ $r = .61, p < .01$ ）が得られた。すなわち、担任教師に対して高い信頼感を抱いている小学生は

ど、担任教師に自分の表面・内面的なことを話すことが多いという関係が明らかとなり、これにより妥当性の予測は支持され、担任教師に対する信頼感尺度の構成概念妥当性の一部が確認された。また、分散分析の結果、担任教師に対する信頼感に学年の主効果が見られたことから、学年別にこれら二つの尺度の相関係数を算出した。その結果、 $r = .52 \sim .64$ （ $p < .01$ ）となり、すべての学年において中程度の相関が見られた。したがって、学年別に見ても、作成した信頼感尺度の構成概念妥当性が確認されたといえる。

この結果は、坂本・内藤（2001）における、学級に対して信頼感を高く抱いている児童は、担任教師に対して自分の内面的なことや表面的なことを多く話すようになるという知見に対応するものであると考えられる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、小学生の担任教師に対する信頼感尺度の作成を行った。本研究での定義を基に、独自に5項目からなる尺度を作成した。そして、主成分分析により尺度を構成し、信頼性・妥当性について検討を行った。主成分分析の結果、第1主成分にすべての項目が高い負荷量を示し、尺度の一次元構造が確認された。したがって、作成した尺度は、酒井（2005）の児童の重要他者に対する信頼感「相手を信頼している感」の一次元構造であるとする知見を反映するものとなった。また、信頼性に関する検討では、十分な内的整合性を持つことが明らかとなった。さらに、妥当性に関する検討では、教師に対する自己開示尺度と有意な正の相関を持つことが

Table 1 担任教師に対する信頼感尺度の主成分分析

項目番号	項目内容	負荷量	M	SD
No.1	先生のことを信頼しています。	.89	3.18	0.94
No.2	先生は、学校で困っているとき、わたしに声をかけてくれると思います。	.86	2.79	1.01
No.3	学校で困ったことがあると、先生のことを頼りにします。	.84	2.83	1.06
No.4	先生は、いざというとき、わたしを守ってくれると信じています。	.83	3.03	0.98
No.5	先生の言うことやすることは、正しいと信じています。	.79	3.37	0.82
		累積寄与率	71.06%	

Table 2 担任教師に対する信頼感尺度の学年差・性差の検討

学年	性別	4年		5年		6年		学年の主効果	性別の主効果	交互作用項	多重比較
		男子	女子	男子	女子	男子	女子				
担任教師に	M	3.24	3.25	3.00	2.82	3.02	2.83	6.38**	1.81	0.62	5, 6年生 < 4年生
対する信頼感	SD	0.72	0.72	0.79	1.00	0.75	0.80				

注) ** $p < .01$

明らかとなり、構成概念妥当性の一部が示された。また、小学生における担任教師に対する信頼感は学年が上がるにつれて低下していくことも明らかにされた。

しかし一方で、本研究にはいくつかの問題点が残されている。第一には、信頼感尺度の信頼性に関して項目の整合性のみを扱っており、再検査信頼性(安定性)については未検討である点である。今後、この点に関して検討を行い、信頼感尺度の安定性を明らかにすることが必要である。第二には、信頼感尺度の妥当性の検討が十分でないことである。今回は、構成概念妥当性の一部の検討にとどまっております、他の妥当性検討についても行う必要がある。

以上のような課題は残るものの、本研究により先行研究における定義を統合して「担任教師に対する信頼感」の定義を行い、それに基づき有用な尺度が作成された点は高く評価でき、この領域における信頼感研究の端緒を開いたといえよう。信頼感は、精神的健康を高め、あるいは維持する効果をもつことや、ストレス耐性の強いパーソナリティと関連していること(天貝, 2001)などが明らかにされており、児童のより望ましい発達のためにも「担任教師に対する信頼感」研究のさらなる発展が望まれる。

引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. *教育心理学研究*, **43**, 364-371.
- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで. 新潮社
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle: Selected papers of E.H. Erikson*. New York: Interpersonal University Press.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1985). Children's perceptions of personal relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, **21**, 1016-1024.
- 五十嵐哲也 (2009). 小中学生の不登校傾向とソーシャルサポートとの関連. *愛知教育大学保健環境センター紀要 IRIS HEALTH*, **8**, 3-9.
- 飯田 都 (2002). 教師の要請が児童の学校適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して—. *教育心理学研究*, **50**, 367-376.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—. 誠信書房
- 岸田元美 (1983). 子どもの教師認知・態度. 学習指導研修, **6**, 84-87.
- 小林正幸・仲田洋子 (1997). 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究—学校の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか—. *カウンセリング研究*, **30**, 207-215.
- Larzelere, R.E., & Huston, T.L. (1980). The Dyadic Trust Scale: Toward Understanding interpersonal trust in close relationships. *Journal of Marriage & the Family*, **42**, 595-604.
- 三隅二不二・矢守克也 (1989). 中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性に関する研究. *教育心理学研究*, **37**, 46-54.
- 文部科学省 (2011). 平成 22 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. 文部科学省
<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf>
2011 年 9 月 30 日
- 中井大介・庄司一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因. *教育心理学研究*, **54**, 453-463.
- 中井大介・庄司一子 (2008). 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連. *発達心理学研究*, **19**, 57-68.
- 中本浩揮・森 司朗・屋良朝栄 (2007). 高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係. *鹿島体育大学学術研究紀要*, **35**, 1-13.
- 大野静一 (1997). 学校教育相談とは何か. *カウンセリング研究*, **30**, 160-179.
- Rempel, J.K., Holmes, J.G., & Zanna, M.P. (1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality*, **57**, 257-281.
- Rotenberg, K.J. (2001). Interpersonal Trust across the lifespan. In P.B. Batles & J. Smester (Eds.), *International encyclopedia of social and behavioral sciences*, pp.7866-7868 New York: Progamon.
- Rotter, D.J. (1967). A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- Rotter, D.J. (1980). Interpersonal trust, trustworthiness, and gubility. *American Psychologist*, **35**, 1-7.
- 酒井 厚 (2005). 対人的信頼感の発達: 児童期から青年期へ—重要な他者間での信頼すること・信頼されること—. 川島書店
- 坂本美紀・内藤満江 (2001). 小学生が持つ担任教師への信頼感に関連する要因—指導行動, 自己

- 開示、スクール・モラルとの関係— 愛知教育大学研究報告, **50**, 143-151.
- 佐竹圭介 (2003). 教育現場における教師に対する生徒の信頼感の研究 九州大学心理学研究, **4**, 195-201.
- 佐藤静一・阿部一徳 (1997). 教師の自己開示及び P-M 指導行動が児童の自己開示と学校モラルに及ぼす効果 熊本大学教育学部紀要人文科学, **46**, 245-257.
- 佐藤静一・服部 正 (1993). 学級「集団」・児童「個人」・次元の学級担任教師の PM 式指導類型が児童の学校モラルに及ぼす交互作用効果 実

- 験社会心理学研究, **33**, 141-149.
- 植草伸之・松元泰儀 (1995). 生徒認知による信頼する教師の態度に関する研究 (2) 日本教育心理学会総会発表論文集, **37**, 596.
- 山岸敏男 (1998). 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム— 東京大学出版会

謝 辞

本調査にご協力いただきました小学校の先生方ならびに児童の皆様へ感謝いたします。

(受稿 9 月 30 日 : 受理 10 月 11 日)